【資料32-1】

第5次総合計画前期基本計画の振り返りについて（概要版）

取組名		10年後に目指したい将来像	振り返りの総括
7	若者が集うまち	自分らしく生きる・活動する若い世代（高校生～30歳代）が増え、三田なら多様な若者が生きづらさを感じることなく「心豊かな暮らし」や「自己実現」ができるというイメージが市内外で醸成されることで、若い世代の転出減、転入増が図られています。また、産官学民連携の共創による地域価値向上により、人口減少下であっても活力が維持されています。	前期計画期間では、若者の流出への対応として、学生のまちへの愛着醸成や、若い世代の移住促進を目的に、学生のまちづくり事業やスモカモス・プロジェクト、移住促進事業などに取り組んできた。成果指標では、学生がまちづくりに関わった「若者のプロジェクト数」や移住相談件数が目標を達成した一方で、人口に関する指標では課題が残った。また、市民意識調査では、施策の重要度は高いものの満足度が低く、認知度や効果の可視化が十分でないことが問題として浮き彫りになった。 後期計画では、まち全体で若者の活動を支援し、市外に出た若者のUターンを促進するための定住・移住促進の仕組みを強化する必要がある。また、三田で育った子どもたちが地域に愛着を持ち、再び帰ってくるサイクルを促すため、地域内外での意識改革と施策の認知度向上に注力することが求められる。 「三田スモカモス・プロジェクト」では、高校生向けプログラムを導入することで、市内在住などより三田にゆかりのある若者への接点を拡大すること、またプロジェクト修了生が引き続き市のまちづくり事業に関わる受皿となるよう現役生の伴走支援の仕組みを構築するなど、関係人口の創出や定住促進に寄与した。（R7：大学生向け12人、高校生向け21人参加）

市民意識調査の結果		指標等の進捗状況								
重要度	3.96		指標名	基準値（R2）	方向性	R4	R5	R6	目標R8
重要度平均からの偏差	-0.02	1	未来を担う若者指数（15～19歳人口の10年後残存率）	63.0%	↑	60.0%	58.2%	60.3%	70.0%
重要度順位	15/25位	2	地域でチャレンジできた学生等若者のプロジェクト数（累計）	2件	↑	14件	29件	64件	60件
満足度	2.71	3	移住相談窓口相談件数（累計）	24件	↑	250件	471件	741件	500件
満足度平均からの偏差	-0.37	4	0～4歳児童数	3,892人	→	3,476人	3,226人	2,963人	3,500人
満足度順位	25/25位								

「ひと」のチカラを育み、活きるまち ～輝く人づくり～

7 若者が集うまち

1. 10年後に目指したい将来像

自分らしく生きる・活動する若い世代(高校生～30歳代)が増え、三田なら多様な若者が生きづらさを感じることなく「心豊かな暮らし」や「自己実現」ができるというイメージが市内外で醸成されることで、若い世代の転出減、転入増が図られています。また、産官学民連携の共創による地域価値向上により、人口減少下であっても活力が維持されています。

	2. 10年後に心配される三田の状況		3. 10年後に目指したい三田の状況	取り組み
A	人口減少や少子化の影響により市内大学等がその規模を縮小することによる若者の減少や官学連携機会が喪失していること	➡	まちで活動する高校生・大学生が増え、市民・企業が学生を支援しており、学校側もその状態を積極的に評価・連携していること	❶
B	人口減少や少子化に伴い、地域で活躍する若い世代が減少することで、若い世代のコミュニティが育たず若者にとっての魅力がないまちとなっていること	➡	若い世代が「やりたい」ことにチャレンジでき、学びや活躍のフィールドとして三田が認識され、市内外の若者が集い、成長していること	❶ ❷
C	住民の世代交代が進まず、オールドタウン化※が進行し、利便施設撤退や公共サービスの水準低下等により、まちが負のスパイラルに入っていること	➡	移住者が中古住宅に入居、高齢者の住み替え等住宅ストックが活用され、都市のスポンジ化※抑制、利便施設や公共サービスが維持されていること	❸
D	複雑化する社会課題に対して主体ごとに既存の対応を継続することで、総合的な効果が生まれにくい社会構造となっていること	➡	産官学民が枠を超えて連携・交流し、共創によるアイデア・活動が生まれており、地域価値や活力の向上が図られていること	❹
E	若い世代を中心とした社会減や出生率の低下等により生産年齢人口の割合が減少し、地域活力が低下していること	➡	一定割合の年少人口と生産年齢人口が確保でき、活動人口についても増加していることで、地域の活力が維持されていること	❺
F	人口減少が進行し、三田に関係ある・興味ある市外の若い世代の関わりもなくなり、地域コミュニティが維持できなくなっていること	➡	市内への通勤通学者や市外への転出者等三田に関わりがある人が継続的に三田に関わり、人口減少下でも活気が維持されていること	❻

※オールドタウン化
一般的に、住宅等の建物の老朽化とそこに居住する住民の高齢化が一斉に進み、その結果、まち全体が老いていくことをいう。

※都市のスポンジ化
空き家や空き地が多数発生し、多数の穴をもつスポンジのように都市の密度が低下することをいう。

※ソーシャルビジネス
子育て・高齢者等の支援や、地方活性、環境保護、貧困、差別問題等さまざまな社会問題の解決を目指す事業をいう。

※ベンチャー企業
革新的なアイデア・技術等をもとに、新しい形態のサービスやビジネスを展開する企業をいう。

※さんだ住まいるチーム
移住促進を目的に市が任命した市民によるチームをいう。

※テレワーク 45ページ参照

※サテライトオフィス
企業または団体の本拠から離れた所に設置されたオフィスをいう。遠隔勤務等に利用される。

「ひと」のチカラを育み、活きるまち　～輝く人づくり～

【7】若者が集うまち

★人口減少対策★

1　10 年後に目指したい将来像

自分らしく生きる・活動する若い世代（高校生～30 歳代）が増え、三田なら多様な若者が生きづらさを感じることなく「心豊かな暮らし」や「自己実現」ができるというイメージが市内外で醸成されることで、若い世代の転出減、転入増が図られています。また、産官学民連携の共創による地域価値向上により、人口減少下であっても活力が維持されています。

	2　10 年後に心配される三田の状況		3　10 年後に目指したい三田の状況	取り組み	指　標
A	住民の世代交代が進まず、オールドタウン化が進行し、利便施設撤退や公共サービスの水準低下等により、まちが負のスパイラルに入っていること	➡	移住促進により住宅ストックが好循環し、公共サービスや商業施設などの都市機能が維持されていること	①	a・b
B	人口減少や少子化に伴い、地域で活躍する若い世代が減少することで、若い世代のコミュニティが育たず若者にとっての魅力がないまちとなっていること	➡	若い世代が「やりたい」ことにチャレンジでき、学びや活躍のフィールドとして三田が認識され、市内外の若者が集い、成長していること	②	a・c
C	若い世代を中心とした社会減や出生率の低下等により生産年齢人口の割合が減少し、地域が疲弊していること	➡	若い世代が将来への明るい希望を持ち、多様な生き方を自ら選択することで、一定割合の年少人口と生産年齢人口が確保でき、地域の活力が維持されていること	③	a
D	人口減少が進行し、三田に関係ある・興味ある市外の若い世代の関わりもなくなり、地域コミュニティが維持できなくなっていること	➡	市内への通勤通学者や市外への転出者等三田に関わりがある、もしくは関心がある人が継続的に三田に関わり、人口減少下でも活力があること	④	a・c

≪前期基本計画≫

4. 取り組み

市民

- 学生等若者のチャレンジ･活動を支援します。
- 若者が目指したいと思えるような生き方･暮らし方･働き方を実践し、若い世代を積極的に受け入れ、育てます。
- 住宅は社会的な公共財という意識を持ち、次の世代に受け継いでいきます。
- 活発に交流を行い、自分ごととして地域課題の解決アイデアを共創し地域価値を高めます。
- 一人ひとりがSNS等で三田の魅力を発信します。

事業者･団体等

- 学生等、若者のチャレンジ･活動を支援します。
- 市民、他企業と交流を活発に行い、自分ごととして地域課題の解決アイデアを共創します。
- 三田の立地環境や魅力を発信します。

市

❶学生がまちをフィールドに自己実現ができる「学びのまち･三田」の整備推進

「学生が成長できるまち三田」を目指し、学生がまちなかで企業･地域･行政等様々な人とつながり、まちをフィールドに活動できる環境整備（まちなか拠点機能の強化、企業や地域とのマッチング、起業や地域活動等チャレンジしやすい支援等）を行います。

❷若い世代に魅力ある「若者が集うまち」の形成（若者の定住推進）

自分と社会との接点を知ることで、自分らしく生きる･働くことに気付き、行動（まちづくり･起業）につながるプログラムの実施、ソーシャルビジネス※等の起業や新規就農の支援、ベンチャー企業※等の誘致等により地域で活躍する若者を増やし、人や経済が域内循環する活動的な「若者が集うまち」三田のイメージを形成します。

❸住宅ストックを中心とした積極的な移住施策の展開（若者の移住推進）

若い世代の移住を促進するため、市民（さんだ住まいるチーム※）が積極的かつ効果的な広報を行うとともに、関係機関との連携等により住宅ストックの円滑な利活用を促進する仕組みを構築します。地域との円滑な情報共有を図り、積極的に移住者の受け入れを支援します。

❹産官学民連携の活性化

連携する目的･効果を明確化することで、企業や大学が地域連携する意義やメリットを持てるようにするとともに、大学等がもつ知財を産官民に移転する仕組みや拠点の構築をはじめ、産官学民がもつ強みを互いに共有することで地域価値を高めます。地域課題を解決するアイデアや活動を共創する仕組みの構築や拠点を整備します。

❺新しい働き方の推進と出産･子育てを支援する仕組みづくり

自分にあった暮らしをする若者が増えるよう新しい働き方（テレワーク※、サテライトオフィス※等）の支援を行います。性別に関わりなく誰もが暮らしやすく出産･子育てに理解ある地域･職場づくりや若者のコミュニティ形成等による出会いの機会創出、子どもをもつことに明るい希望を持てるライフデザイン構築支援等少子化の進行を緩和します。

❻関係人口の増加による地域の活力維持

若い世代が積極的に地域と交わり活動することで三田に対する愛着を育み、継続的に地域活動に関わる、三田の産品を購入してもらうなど関係人口を増加させます。若い世代にとって魅力的な地域、人の育成を支援し、これらにより地域の活力維持を図ります。

5. 成果指標等

指標名	基準値	基準年	目標値（R8）
未来を担う若者指数(15～19歳人口の10年後残存率)	63%	（R2）	70%
地域でチャレンジできた学生等若者のプロジェクト数	2件	（R2）	60件
移住相談窓口相談件数	24件	（R2）	500件
0～4歳児童数	3,892人	（R2）	3,500人

■主要な条例･規則及び関連計画

条例･規則	ー
関連計画	ー

≪後期基本計画(素案)≫

4　取り組み

市民

◆住宅は社会的な公共財という意識を持ち、次の世代に受け継いでいきます
◆活発に交流を行い、自分ごととして地域課題の解決アイデアを共創し地域価値を高めます。
◆学生等若者の「やってみたい」チャレンジ・活動を支援します。
◆若者が目指したいと思えるような生き方・暮らし方・働き方を実践し、若い世代を積極的に受け入れ、育てます。
◆一人ひとりがＳＮＳ等で三田の魅力を発信します。

事業者・団体等

◆市民、他企業と交流を活発に行い、自分ごととして地域課題の解決アイデアを共創します。
◆学生等、若者の「やってみたい」チャレンジ・活動を支援します。
◆三田の立地環境や魅力を発信します。また、三田で働くことの魅力を若者に伝えます。

市

①　若者や子育て世代の積極的な移住施策の展開（若者の移住促進）

職住近接を促進するなど、住み替え支援等で住宅ストックの好循環を促し、若者や子育て世代の移住・定住を促進します。地域の安全・治安の良さや教育環境が充実していることなどのまちの魅力を最大限に活用し、地域団体や住まいるチーム等との協働で、まちの魅力発信、住宅情報の提供、移住検討者へのサポート体制を整え、地域とのつながりを築きながら移住できる仕組みを構築します。移住者同士や地域の人などが交流できる場や活動を提供し、移住・定住を支援します。

②　若い世代に魅力ある「やってみたいがかなうまち」の形成（若者の定住促進）

若者がまちをフィールドに地域や企業・大学など多様な主体とつながりながら学び、挑戦し、自己実現を図ることで、若者が三田を好きになる「まちへの愛着」を醸成します。起業や就農、地域活動等も含めて地域で活躍する若者を支援し、継続的にまちに関わる若者のコミュニティづくりを進めるなど、人や経済が域内循環する活動的な「やってみたいがかなうまち」のイメージを形成し、若者の定住、もしくは一度出て行ってもまた戻ってきたくなるまちづくりを進めます。

③　若者が自分らしい生き方を描けるワークライフデザイン支援の推進

多様な働き方やライフスタイルに対応した地域・職場環境の形成を通じ、若者が自分らしい生き方や将来像を主体的に描けるまちづくりを推進します。テレワークや副業、起業等の柔軟な働き方を支援するとともに、企業や地域が連携し、若者の生活を支える関係性やコミュニティの形成を促進します。働くことの意義や心身の健康、将来のライフイベントを含めて統合的に捉えるワークライフデザインの機会を提供し、結婚や子育てを含む多様な生き方について、若者が自身の価値観や状況に応じて選択できるよう、働き方や暮らしを支える制度や地域のつながりを含めた環境整備を進めます。

④　関係人口の増加による地域の活性化

市外の若者や子育て世代が三田に関心を持ち、地域に関わるきっかけづくりを行うことで、多様な関わりを促進します。地域団体や企業、大学と協力し、ふるさと納税を通じた個人的なつながりをはじめ、イベントを通じた交流や観光などで来訪の機会や三田との接点を創出します。地域活動や課題解決につながるイベントなどへの参加を促進し、まちへの愛着を醸成、移住・定住施策や学生のまちづくり事業との連携により、関係人口が地域の担い手や定住者となる流れを作ります。

◆評価指標

	指標名	現状値（基準年）	目標値（R13）
	KGI 施策重要度･満足度（市民意識調査）	重要度 3.96pt 満足度 2.71pt	↑
	KGI 人口	105,949 人(R6 年度末)	103,711 人
	KGI 15～29 歳人口の 10 年後の残存率	67.5%(R6)	77%
	KGI 移住相談窓口を通じた転入者（世帯数）	105 世帯(R6)	200 世帯／年
a	KPI「今後も住み続けたい」･「現在の住まいは移りたいが、三田市内に住みたい」もしくは「一度転出しても三田市に戻ってきたい」と思う子どもと保護者の割合	58.9%(R6) （「戻ってきたい」の指標は R8 から）	70%
b	KPI 移住定住相談窓口相談件数	271 件（R6）	500 件／年
c	KPI 地域でチャレンジできた学生等の若者のプロジェクト数	34 件（R6）	60 件／年

◆主要な条例・規則及び関連計画

条例・規則	―
関連計画	―

最上位指標

【資料32-3】

市民の幸せ実感度の向上

	KGI（成果指標）	KPI（活動指標・取組指標）		現状値	目標値（R13）	指標の設定理由	所管課
7 若者が集うまち	・施策重要度 ・施策満足度	－	新規	重要度 3.96pt 満足度 2.71pt	向上	全施策固定指標	－
	人口	－	新規	105,949人 （R6年度末）	103,711人 （R13）		－
	15～29歳人口の 10年後の増減率	－	新規	67.5%（R6）	77%	若者の流出の契機となる大学進学と就職にあたる10代後半から20代の人口の、10年後の増減を見ることで定住と移住の事業効果を検証する。 【現状値（R6）】 15～19歳の10年後：60.3% 25～29歳の10年後：86.2% 【目標値】 25～29歳の10年後が約100%を維持していた令和元年度の数値を目標とする。 （R1） 15～19歳の10年後：65.7% 25～29歳の10年後：99.4%”	－
	移住相談窓口を通じた 転入者（世帯数）	－	新規	105世帯（R6）	200世帯／年	財政ロードマップに掲げた「１０年後に１０万人を維持」するためには、移住の目標として年間200世帯、約500人の移住者を獲得することが必要であると考える。	移住定住促進課
		「今後も住み続けたい」・「現在の住まいは移りたいが、三田市内に住みたい」もしくは「一度転出しても三田市に戻ってきたい」と思う子どもと保護者の割合	新規	58.9%（R6） （「戻ってきたい」の指標はR8から）	70%	定住のためには、子どもの頃から地域に親しみ、まちへの愛着を醸成することが必要と考える。また、子どもにその意識を持ってもらうためには、保護者の関わり方が重要であると考える。	移住定住促進課
		移住定住相談窓口相談件数	継続	271件（R6）	500件／年	移住のKGIとした転入者を達成するためには、２～３倍の移住相談を受ける必要がある。	移住定住促進課
		地域でチャレンジできた学生等の若者のプロジェクト数	継続	34件（R6）	60件／年	若者のまちへの愛着を醸成するためには、地域とつながり、支援を受けてチャレンジする経験が鍵となると考える。	移住定住促進課